

No.42/2025

図書館文化史研究

日本図書館文化史研究会

●特別講演●

私の学校図書館史研究

—それはなぜ、どのようにして、何を確かめようとしたのか— 塩見 昇 1

●論文●

帝国図書館による機関への貸出の量的実態 仲村 拓真 13

●研究ノート●

近代日本公共図書館建築に関する史的考察 2

—1920年代以降を中心に— 奥泉 和久 39

●書評●

吉田昭子『東京市立図書館物語：

戦前の市立図書館網計画をめぐる夢と現実』 新藤 透 91

『韓国国立中央図書館 司書部日誌：1948年(檀紀4281年)』 田中 亮 117

ISSN 1342-6761 日外アソシエーツ発行

[特別講演]

私の学校図書館史研究

—それはなぜ、どのようにして、何を確かめようとしたのか—

日本図書館文化史研究会 2024 年度研究集会・総会
2024 年 9 月 7 日 龍谷大学梅田キャンパス

しおみ のぼる
塩見 昇

(大阪教育大学名誉教授)

はじめに

本研究会には発足の当初から名前を連ねておりますが、この総会・研究集会に参加するのは初めてだろうと思います。私自身、自分を図書館史の研究者と思ったことはないし、「図書館史研究会」に格別の思い入れがあったわけではありませんが、設立の発起人の中に石井さんや河井さん、川崎さんなど知己の名前を多く見て、応援しようくらいのつもりで加わったのだと思います。従ってこれまでさほど熱心な会員ではありませんでした。その私に今回、総会・研究集会での特別講演の依頼があったのは、昨年春に出版した『塩見昇の学校図書館論—インタビューと論考』が運営委員会の皆さんのお目に留まったことが契機になってのことかと思えます。

この本は、2023 年 5 月に日本図書館研究会（日図研）の学校図書館史研究グループ（略称ソルトの会）の 5～6 年をかけた作業の成果として、刊行に至ったものです。本書をまとめた 8 人のメンバーのほとんどは長年学校図書館の現場で司書として優れた活動を実践し、学校図書館問題研究会の結成に主軸として参加、要職を務めてきた人たちであり、私ともそれぞれに長いお付き合いのある人たちです。その彼女たちから、かねて関心を寄せてくれている私の学校図書館論がどのように形成されてきたのか、その成り立ちを詳しく聞きたい、そのためのインタビューに

応じてほしいと希望されたのが発端です。2018年12月にその初回が開かれ、爾来14回、コロナの時期のzoomによる会合も含めて聞き取りが行われ、その成果が第1部にまとめられ、その結果と私のこれまでの著作や講演録等を基に8人のメンバーが二人ずつ分担して執筆された論考を第2部として構成されたのが本書です。

私としても図書館界に足をを入れて半世紀をよほど越えるこの時期に、学校図書館という切り口からに限ってではありますが、私自身の図書館人としての自己形成、研究者や教育者としての仕事がいかに蓄積されてきたかを振り返るよい機会をつくっていただいたと感謝もし、問いかけにできる限り誠実に応えてきた所産です。

今回お話しする「私の学校図書館史研究」の対象は、直接には1986年に全国学校図書館協議会から刊行した『日本学校図書館史』に集成された1970年代から80年代初めに集中的に行ったものであり、現在取り組んでいる、もしくは継続している研究ではありません。私はその時期、ひょんなことから向きかわざるを得なくなった学校図書館研究のきっかけとして、どうしてもやらざるを得なかった仕事であり、それがその後の学校図書館研究、もし私の学校図書館論になにがしかの特色なり独自のものがあるとすれば、その核になる部分を占めるものであり、今回のインタビュー本を基にお話しする際に昔の歴史研究のことをあえて話題にする理由でもあると申し上げてよいと思います。

この時期に私が集中的に取り組んだ歴史研究は、「学校図書館とは何か」「なぜ学校に図書館が必要なのか」という根源的な問いに私なりの自分で納得のいく答えを得るために不可欠のチャレンジであり、戦前の日本の義務教育学校の教師たちが、子どもたちに真に生きる力をはぐくみたいと、国家権力が強要する少国民錬成とは異なる教育目的を、命と職を賭して追求した教育実践の中で意識的に強く関心を寄せた児童文化、とりわけ「課外読み物」の積極的な教材化、読書のすすめ、そのたくわえである児童文庫づくりと活用の実践にこそ「学校のなかの図書館」の基点があるという学校図書館観に確信を見出す重要なプロセスだったと言えます。教育大学の教師になった1971年から80年代初めころまでの厳しい苦闘の結果がそこであり、その課題に着目したことが私の学校図書館論の出発でした。

その研究の集成である自著『日本学校図書館史』については刊行当初に本会の『図書館史研究会ニュース・レター』25号(1987年2月)で

永末十四雄さんから丁寧な書評をいただき、それについてのコメントを次号に書かせてもらったことがあり、そこでのやり取りに一部今回の本でお答えしたことにもなっているかと思っています。

以上、今回の講演に至る経緯とテーマとした「私の学校図書館史研究」の意味、テーマにつけた長ったらしい奇妙な副題の言わんとするところについて述べてきました。私の学校図書館論形成に占める「歴史研究」の重みをご理解いただければありがたいと思います。

学校図書館との出会い(1971年4月)

私の学校図書館との出会いは1971年4月1日、大阪教育大学で専任講師としての辞令を受けたところで突如現れました。「突如」というのは正確ではないでしょうが、実際にはまさに「突如」という表現に近いものであったことはたしかです。

1971年3月末までの私は1960年4月に入職した大阪市の司書として、初めはまず2年近く中央図書館の創設事務で図書整理の仕事に専念、1961年11月の中央図書館開設後は主として電話による調査相談業務に従事し、のちに高校生を対象とする学習室にもしばらく勤務しました。

しかし当時、特に1967年頃から退職する70年度末にかけて私が最も力を注いでいたのは、大阪市職員組合教育支部図書館分会(仮称)の分会長といってよい立場で、図書館の管理職と協働して進めた中央図書館の事務事業の見直し、再検討の取り組みでした。1972年から具体的に進展する大阪市立図書館の24区すべてに地域館を配する全域サービス体制に向けての助走期であり、組合の自治研活動と位置付けてよい活動に奔走していました。この取り組みは私の市立図書館在職中の最も意義深い成果だったと自負している内容ですが、ここでそれを話す余裕はありませんので、その詳細は次の文献に譲ります。このケースは、1963年の『中小レポート』をうけ1960年代半ば以降の日本における公立図書館の飛躍的な進展の大都市における数少ない実践事例として貴重だし、その推進に労働組合が大きく参画した点で特徴的な実践例といえます。こうした事実は図書館の正史には出てきません。ぜひご参照いただきたいと思います。

注) 塩見昇「1960年代半ばから70年代初頭の大阪市立図書館—地域館整備に向けての歴史的な転換の背景をたどる」相関図書館学方法論研究会編著『図書館・文化・社会』6集 松籟社 2022年 p.3-56

編集後記

2024年9月に大阪にて2024年度研究集会在オンライン配信を併用して行われました。塩見氏の特別講演はその成果です。田中氏の書評は韓国語の文献を取り上げています。かつて、本誌第25号(2008年)で、英語文献の書評を掲載しています。今後も海外の重要な文献の書評があれば、お寄せください。

次号以降も引き続き、会員のみならずには研究発表の成果をご投稿していただきたく願いたします。

最後になりましたが、刊行についてかわらぬご尽力をいただいている日外アソシエーツ(株)編集局のみなさまに、お礼を申し上げます。

2025年7月31日

泉山靖人(東北学院大学)
新藤透(國學院大學)
鈴木宏宗(国立国会図書館)
三浦太郎(明治大学)
横山道子(神奈川県立深沢高等学校)

編集委員 50音順

図書館文化史研究(年刊)

第42号 2025年9月25日発行

編集 ©日本図書館文化史研究会 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学司書・司書教諭課程

発行 日外アソシエーツ株式会社 〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16
電話 03(3763)5241(代) 鈴木ビル大森アネックス

印刷・製本 株式会社平河工業社 表紙デザイン 津田ミナ子

ISBN 978-4-8169-3069-0